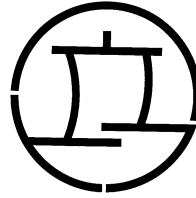


枚方のあゆみ



市章は、本市が淀川とともに栄えてきた町で、船とは深いつながりがあるため、かたかなの「ヒ」「ラ」と漢字の「方」を組み合わせ、帆かけ船をかたちどっている。

淀川の流れとともに

枚方市は、大阪府の東北部にあつて、京都府・奈良県と境を接しています。地形的には、生駒山地から北に延びる八幡丘陵、市域中央部を占める交野台地、淀川沿いの沖積低地という東高西低の地勢を示し、台地上には旧石器時代から人が住みつき、土地利用がなされてきました。淀川の水運を介して、交通の要衝でもありました。

いつのころから「ひらかた」と呼ばれるようになったのかはわかりませんが、『日本書紀』に「ひらかたゆ笛吹き上る近江のや毛野の稚子い笛吹き上る」という歌が残されており、『播磨国風土記』には「河内国茨田郡枚方里」と記されています。

中宮の特別史跡百済寺跡は、奈良時代中期に河内守に任ぜられた百済王敬福が建立したと考えられる寺跡で、七堂伽藍のいらかを並べた華麗な寺院でした。平安時代になると、交野台地は交野ヶ原と呼ばれ、貴族の遊獵地として名をはせました。文徳天皇の第一皇子惟喬親王は、渚院という別荘を営み、鷹狩に興じ四季の花を眺めて心を慰めました。

南北朝時代から戦国時代にかけて、東高野街道が南北に縦貫する枚方はたびたび戦場となり、八幡市境の洞ヶ峠や長尾の荒坂山では激しい戦闘が繰り広げられました。

江戸時代に入ると、岡新町・岡・三矢・泥町の4か村は枚方宿に指定されて宿場町を形成し、また、淀川を上下する過書船などの中継地としても賑わいました。

明治になると、警察署・裁判所・郡役所などが枚方に設置され、北河内の行政の中核地としての役割を担いました。明治43年京阪電車の開通は、大阪近郊住宅地としての可能性を開き、「枚方菊人形」は秋の風物詩として全国に知れわたりました。明治29年、陸軍は禁野火薬庫を設置し、昭和13年に枚方兵器製造所、翌14年香里火薬製造所を開設、枚方は一大兵器生産地となりました。そして、昭和14年3月1日禁野火薬庫大爆発の惨事が起こりました。

昭和22年8月1日に市制を施行。香里製造所跡地が当時東洋一の規模を誇った香里団地に生まれ変わるなど、戦前の兵器のまちから住宅を中心とする平和のまちへと発展してきました。市制施行当時4万人余であった人口は、昭和30年津田町の合併を経て昭和40年代から急増し、現在は40万規模の中核市として発展しています。